

熊本甲佐 10 マイル公認ロードレース大会の歴史

○ 甲佐マラソンの始まり(昭和 27 年)

熊本甲佐 10 マイル公認ロードレース大会の前身である、第1回熊本甲佐マラソン大会が、昭和 27 年 12 月 14 日に熊本日新聞社主催(後援:熊延鉄道・甲佐町)で行われた。コースは、熊本日新聞社前から甲佐小学校(甲佐町豊内)校庭までの 25 ㎞のコースで、体力と精神面の強化を目的にスタートした。

出場については 14 歳以上であれば誰でも参加できたが、当時は道路も舗装されておらず、また御船町の妙見坂のジグザグ坂道の登り下りなどの難所もあったが、砂利道を 300 余名の選手が汗と埃にまみれながら健脚を競い、宮原信義(荒尾高)が1時間 25 分 19 秒で優勝を飾った。2位には上田大助(熊本工高)、3位には村山利光(阿蘇高)が入った。

その後、コースが嘉島町上島から甲佐町白旗を経由し甲佐小学校までの 23.5 ㎞と平坦コースに変更となったため、以前よりも好記録が出やすくなった。しかし、道路は相変わらず砂利道であったため、選手はでこぼこを避けながら走ることを余儀なくされた。

第 22 回大会から 24 回大会までは、現拓殖大学監督の岡田正裕(フンドーダイ)と同僚の中村博晴や岩下隆信(自衛隊)らのデッドヒートが展開された。

しかし、この大会は交通事情などにより、昭和 50 年の第 24 回大会で終了した。

○ 10 マイル甲佐マラソン大会の始まり(昭和 51 年)

昭和 51 年から従来の甲佐マラソンを、**第 1 回 10 マイル甲佐マラソン大会**(熊本日新聞社、熊本バス、甲佐町、甲佐町体育協会共催)と変え、甲佐町中央公民館(甲佐町豊内)前をスタート、ゴールとし、甲佐町白旗折り返しのコースで再スタートした。

本大会には、県内外から中学生から 45 歳までの 150 人の選手が参加し、またオープン参加として、小学生も多数参加し沿道を沸かせた。レースは渡辺幸輝(九州産交)が 49 分 59 秒で優勝を飾った。2位には坂口充(八代一高)、3位には三村光明(第一工高)が入った。

第2回大会(昭和 52 年 12 月 11 日)は高校生が上位を独占した。九州学院高の石島真澄が 49 分 33 秒で優勝し、2位に坂口充(八代一高)、3位に吉川幹穂(第一工高)が入った。

第3回大会(昭和 53 年 12 月 10 日)から、種目を 10 マイルの部、高校 10 ㎞の部、中学 5 ㎞の部の3部門で実施した。10 マイルの部で、斗高克敏(熊本西高教)が 50 分 06 秒で優勝。高校 10 ㎞の部では、のちに 1992 年開催のバルセロナオリンピック(ス

ペイン)10,000 ㊦日本代表に選出された浦田春生(九州学院高)が 30 分 51 秒で、中学5[㊦]の部では金森武(御船中)が 15 分 34 秒で優勝した。

第4回大会(昭和 54 年 12 月 9 日)は、10 マイルの部において九州産交勢が上位を独占した。江藤誠一郎が 49 分 09 秒で優勝、2位に三村光明、3位に梅田義弘が入った。高校 10[㊦]の部で堀田正弘(八代一高)が 31 分 33 秒、中学5[㊦]の部で西村明雄(出水中)が 15 分 45 秒で優勝した。

第5回大会(昭和 55 年 12 月 14 日)は、10 マイルの部で渡辺幸輝(九州産交)が 50 分 06 秒で第1回大会以来の2度目の優勝。2位に前田洋(免田町教育委員会)、3位に竹崎安雄(天草消防署)が入った。高校 10[㊦]の部で堀田正弘(八代一高)が 30 分 39 秒、中学5[㊦]の部で西村明雄(出水中)が 15 分 13 秒で共に2連覇を飾った。

また、第5回大会を記念し、旭化成の宗兄弟を迎えて陸上教室を開催した。

第6回大会(昭和 56 年 12 月 6 日)10 マイルの部で、前田洋(免田町教育委員会)が前年2位の雪辱を果たし 50 分 10 秒で優勝した。地元甲佐町の久佐賀忠(熊本工大)が4位に入る健闘を見せた。高校 10[㊦]で真崎善久(専大玉名高)が 31 分 22 秒で、中学5[㊦]の部で守田健彦が 15 分 19 秒で優勝し出水中勢が3連覇を飾った。

第7回大会(昭和 57 年 12 月 5 日)は、10 マイルの部で、山辺義一(熊本工大)が 49 分 50 秒で優勝し、九州電工の長野寿一、中村敬士がそれぞれ2位、3位に入った。高校 10[㊦]で松下功(九州学院高)が 31 分 14 秒で、中学5[㊦]の部で西村昭児(米野岳中)が 15 分 45 秒で優勝した。

○ 日本陸上競技連盟の公認コースとしてスタート(昭和 58 年)

第8回大会(昭和 58 年 12 月 11 日)から、同コースは日本陸上競技連盟の公認コースとなり、名称を「熊本甲佐 10 マイル公認ロードレース大会」と変更し開催した。

本コースは、スタート地点から折り返し地点まで高低差が約 20 ㊦であるため、記録の出るコースとして、全国の実業団などに参加を呼び掛けた。

また、本大会に全国各地の実業団選手が出場することで、全国に本町をPRするとともに

に、熊本甲佐 10 マイル公認ロードレース大会(熊本陸上競技協会、熊本日新聞社、熊本バス、甲佐町共催)の知名度アップを図った。

同回大会から、新たに女子5^{キロ}の部を設け、一般10マイル・高校10^{キロ}・中学男子5^{キロ}の4種目でスタートをきった。

公認一般10マイルの部には、54人が出走。優勝争いは、本田技研の久保田茂と山辺義一の争いとなり、久保田が大会初の48分台(48分55秒)の大会新記録で優勝を飾った。

高校10^{キロ}には、第34回全国高校駅伝出場を決めていた矢部高校勢の松田卓也と西山公啓が1位と2位を分け合った。

新設の女子5^{キロ}には、43人が出場し、し烈なトップ争いが繰り広げられ、初代優勝者には坂井ルミ(菊水中)が17分34秒で輝いた。

また、中学男子5^{キロ}の部では、白浜成希(八代二中)が15分50秒で優勝した。

第9回大会(昭和59年12月9日)において、10マイルの部で中村智幸(九州産交)が49分38秒で優勝。女子5^{キロ}において甲佐町出身の高浜和美(信愛女学院高)が18分01秒で優勝し、敢闘賞も獲得した。

高校10^{キロ}で宮本光蔵(阿蘇農高)が31分15秒、中学男子5^{キロ}で石松進一郎(阿蘇北中)が15分36秒で優勝した。

第10回記念大会(昭和60年12月8日)として、初めて九州各県より7名の選手を招待した。10マイルで、48分21秒の大会新記録で久保田茂(本田技研熊本)が第8回大会以来2度目の優勝。高校10^{キロ}でも30分24秒の大会新記録で嘉賀新吾(鳥栖工高)が、女子5^{キロ}でも17分19秒の大会新記録で坂井ルミ(菊水中)が優勝。敢闘賞は、女子の部で6位に入賞した甲佐町出身の福田清美(甲佐高)が獲得。中学男子5^{キロ}では、柴田良広(八代一中)が15分34秒で優勝した。

第11回大会(昭和61年12月14日)は、10マイルでは48分11秒の大会新記録で山辺義一(本田技研熊本)が第7回大会以来2度目の優勝。後に1992年バルセロナオリンピック(スペイン)のマラソンで銀メダリストとなる森下広一(旭化成)が4位に入った。中学男子5^{キロ}の部でも15分23秒の大会新記録で本川一美(高森中)が、女子5^{キロ}でも17分08秒の大会新記録で栗津聡子(京陵中)がそれぞれ優勝した。女子の部では、2位から4位までの熊川貴子(清和中)、松野明美(鹿本高)、田代美保(熊本商高)も大会記録を更新。3位の松野は、後にソウルオリンピック(韓国)10,000^{メートル}の日本代表に選出された。

高校10^{キロ}では、桑迫守(大矢野高)が30分57秒で優勝した。

第12回大会(昭和62年12月13日)は、47分27秒の大会新記録で亀鷹律良(旭化成)が優勝。新人賞を3位に入った大崎栄(旭化成)が獲得。女子5^{キロ}の部も16分46秒の大会新記録で村中真保美(九州日本電気)が優勝し、2位の山田典子(九州日本電気)も大会新記録。

高校10^{キロ}では永井博一(水俣高)が30分33秒で、中学男子5^{キロ}では前田重信(下益城城南中)が15分28秒で優勝した。

第13回大会(昭和63年12月11日)では、記録が46分台に突入し、46分51秒の大会新記録で前田直樹(旭化成)が優勝。敢闘賞に2位に入った西村功(旭化成)、新人賞には3位に入った藤田幸一(宮崎沖電気)が選ばれた。高校10^{キロ}でも30分11秒の大会新記録で酒見晃(福大大濠高)が優勝。女子の5^{キロ}でも16分36秒の大会新記録で村中真保美(九州日本電気)が2連覇。中学男子5^{キロ}では、堀川勇一(南小国中)が15分37秒で優勝した。

第14回大会(平成元年12月10日)では、後のバルセロナオリンピック(スペイン)のマラソンで銀メダルを獲得した森下広一(旭化成)が招待選手として出場し、46分34秒の大会新記録で優勝。新人賞を4位に入った鈴木尚人(本田技研狭山)が獲得した。高校10^{キロ}は緒方寿和(熊本工高)31分04秒、中学男子5^{キロ}高宮博隆(白水中)15分35秒、女子5^{キロ}栗津聡子(済々黌高)16分56秒でそれぞれ優勝した。

第15回記念大会(平成2年12月9日)として、1980年のモスクワオリンピック(旧ソ連)、1984年のロサンゼルスオリンピック(アメリカ)に選出された宗猛(旭化成)や、浦田春生(本田技研狭山)を含め総勢16名の選手を招待。初めての外国人選手であるトーマス・オサノ(沖電気宮崎)が出場し、6大会連続の大会新記録を樹立し、46分24秒の好タイムで優勝。新人賞に山頭直樹(安川電機)、敢闘賞に浦田春生(本田技研狭山)が選ばれた。出場者も、各部門総数850名を越える大会となった。高校10^{キロ}は昨年(中学男子5^{キロ})に続き高宮博隆(九州学院高)が30分53秒で、中学男子5^{キロ}は島田健夫(八代七中)が15分32秒で、女子5^{キロ}では松窪美奈(湖東中)が17分03秒で優勝した。

第16回大会(平成3年12月8日)は、米重修一(旭化成)が46分35秒の好記録で優勝。新人賞を熊谷勝仁(ダイエー)、敢闘賞を大崎栄(旭化成)が獲得した。高校10^{キロ}は尾方挙志(熊本工高)が30分59秒で、中学男子5^{キロ}は牛島裕章(七滝中)が15分26秒、女子5^{キロ}は松窪美奈(出水中)が16分56秒で2連覇を飾った。

第17回大会(平成4年12月13日)からは、熊本朝日放送(KAB)でテレビ放映を開始(中継録画)。放送第1回目は佐保希(旭化成)が46分34秒で優勝し、新人賞も獲得。敢闘賞はB・シェリフ(マツダ)が獲得した。

高校10^キは吉浦真一(九州学院高)が30分21秒、中学男子5^キは坂田修宏(本渡中)が15分42秒で優勝。女子5^キは、松窪美奈(信愛女学院高)が17分17秒で3連覇した。

第18回大会(平成5年12月12日)では、S・マヤカ(山梨学院大)が46分17秒の大会新記録で学生として初めて優勝し、新人賞も獲得。敢闘賞には2位の犬伏孝行(大塚製薬)が獲得し、6位までが46分台の高速レースとなった。

高校10^キは東勝博(鎮西高)が30分21秒、中学男子5^キは橋本征治(蘇陽中)が15分35秒、女子5^キは田河郁(尚絅短大)が17分11秒で優勝した。

第19回大会(平成6年12月11日)は、高尾憲司(旭化成)が46分50秒で優勝し、新人賞と敢闘賞には2秒差で2位となった立花和紀(旭化成)が獲得し、4位までを旭化成勢が占めた。高校10^キで東勝博(鎮西高)が29分59秒の大会新記録で2連覇を飾った。中学男子5^キで一二隆徳(本渡中)が15分42秒、女子5^キは17分00秒で嶽道加奈子(熊本市立商業高)が優勝した。

第20回記念大会(平成7年12月10日)は、第1回大会から19回大会までの歴代優勝者を特別招待し、功労者表彰を行った。大会は佐藤信之(旭化成)が46分20秒で優勝し、4位までを旭化成勢が独占。8位までが46分台の高速レースとなった。新人賞に2位の小島宗幸(旭化成)、敢闘賞に4位の西政幸(同)。また、女子5^キは片山弘美(NEC九州)が16分17秒の大会新記録で優勝。高校10^キは山田潤一郎(鎮西高)が30分00秒で、中学男子5^キは木實淳治(蘇陽中)が15分27秒で優勝した。

第21回大会(平成8年12月8日)は、川嶋伸次(旭化成)がJ・シーブラー(NEC)とゴール直前までデッドヒートを展開し、日本最高記録にあと12秒と迫る45分52秒の好記録で優勝を飾った。なお、2位のJ・シーブラーも同タイム。優勝タイムは夢の45分台へと突入した。また、5位までが大会新記録となり例年になくハイレベルのレースとなった。新人賞は5位に入った三木弘(旭化成)、敢闘賞は8位の中村祐二(山梨学院大)が獲得した。

高校10^キは渡辺哲浩(熊本市立商業高)が30分11秒で、中学男子5^キは斉藤昌宏(砥用中)が15分25秒で優勝。女子5^キでは片山弘美(NEC九州)が16分33秒で2連覇を飾った。

第22回大会(平成9年12月14日)は、前半から速いペースでレースが進み、日本最高記録が期待されたが、惜しくも大会記録に3秒遅れる 45 分 55 秒で、高橋健一(ダイエー)が優勝。新人賞に6位の古田哲弘(山梨学院大)、敢闘賞に7位の入船敏(京セラ)。また、女子5^{キロ}では、森垣智子(旭化成)が 16 分 04 秒の大会新記録で優勝し、片山弘美(NEC九州)も大会新を出したが3連覇を阻止された。
高校 10^{キロ}では富田善継(鎮西高)が 30 分 10 秒で、中学男子5^{キロ}は篠原薫(熊本西原中)が 15 分 31 秒で優勝した。

第23回大会(平成10年12月13日)は、レース序盤から招待選手ら12名の集団で折り返し、後半は4人によるトップ争いとなったが、J・シーブラー(NEC)が最後に木庭啓(旭化成)と同タイムながら 46 分 22 秒で優勝し、木庭は新人賞を獲得。敢闘賞には3位に入った奈良修(NTN)。また、女子5^{キロ}では、片山弘美(NEC九州)と藤川亜希(ララ)との一騎打ちとなり、2人とも大会新記録を樹立。最後に片山が 15 分 55 秒で3回目の優勝した。
高校 10^{キロ}は山本大輔(熊本市立商業高)が 30 分 13 秒で、中学5^{キロ}は野間俊哉(宇土鶴城中)が 15 分 31 秒で制した。

第24回大会(平成11年12月12日)は、前半向かい風のためトップグループは大集団を形成するが、12^{キロ}過ぎから4人に絞られ残り1^{キロ}で2人がスパート。小島忠幸(旭化成)が渡辺共則(同)を振り切り 46 分 02 秒の好タイムで優勝。新人賞には2位の渡辺共則、敢闘賞を4位の柴田学(山陽特殊製鋼)と7位のS・ワチーラ(九州産交)が獲得。女子5^{キロ}も旭化成の小島江美子が 15 分 56 秒で制した。高校 10^{キロ}は中川大輔(小林高)が 30 分 07 秒で、中学男子5^{キロ}は原田聖也(稜南中)が 15 分 56 秒で優勝した。

第25回記念大会(平成12年12月10日)本大会では、第20回から第24回までの優勝者を選手として特別招待。レースはスタートから先頭に立ったS・ワチーラ(NEC)が前半から後続に対し揺さぶりをかけ、6^{キロ}過ぎには独走態勢に入る。折り返しでは大会記録を6秒上回ったが、12^{キロ}過ぎにペースダウンし後続に追い上げられたがそのまま逃げ切り、46 分 44 秒で優勝。新人賞に6位に入った瀬戸口賢一郎(旭化成)、敢闘賞に2位の家谷和男(山陽特殊製鋼)。また、高校 10^{キロ}で、川崎洋樹(小林高)が 29 分 49 秒の大会新記録で優勝。中学男子5^{キロ}は黒木慎介(宮崎県妻中)が 15 分 29 秒で、女子5^{キロ}は中里恵美子(ベスト電器)が 15 分 56 秒で優勝した。

第26回大会(平成13年12月9日)から、日本の実業団に所属する外国人の出場が多くなり、記録も一気に上がった。S・マイナ(トヨタ自動車)が 45 分 29 秒で優勝し、4位までが外国人で占め、日本人のトップは天津誠(トヨタ自動車九州)の 46 分 44 秒で、敢闘

賞を獲得。新人賞に2位のJ・ワイナйна(スズキ)。なお、中学5^キでは、吉野将悟(菊陽中)が15分10秒で15年ぶりに大会記録を更新。

高校10^キでは本田慶太(鎮西高)が30分02秒で、女子5^キは宗由香利(聖心ウルスラ学園高)が16分06秒で制した。

第27回大会(平成14年12月8日)では、前半から積極的にレースを引っ張ったJ・マイナ(アラコ)が大会記録を破る45分20秒で優勝。日本人では3位に岩水嘉孝(トヨタ自動車)が入り新人賞を獲得。敢闘賞には5位に入った永田宏一郎(旭化成)。

高校10^キも上野飛偉楼(鎮西高)が29分43秒の大会新記録で優勝。中学男子5^キは大野修(苓北中)が15分43秒で、女子5^キは浅田優美(信愛女学院高)が16分39秒で優勝した。

第28回大会(平成15年12月14日)では、M・マサシ(スズキ)とJ・マイナ(アラコ)の2人がスタートから飛び出し、折り返しを過ぎてM・マサシがスパート、独走で45分30秒の好タイムで優勝。日本人トップは、3位の佐藤智之(旭化成)の46分50秒。佐藤は敢闘賞を獲得。新人賞は4位に入ったJ・ガシュウリ(愛知製鋼)。

高校10^キは家入颯正(九州学院高)が30分05秒、中学男子5^キは橋本登志郎(蘇陽中)15分39秒、中学女子5^キは西川生夏(熊本中央高)が16分56秒で制した。

第29回大会(平成16年12月12日)は、8位までが外国人選手で占め、優勝したM・マサシ(スズキ)が世界最高記録(参考)となる44分41秒で2連覇。9位に入った大森輝和(くろしお通信)が新人賞。10位の小島忠幸(旭化成)が敢闘賞を獲得した。

高校10^キでは、海外からの留学生として初めて出場したJ・カリウキ(滋賀学園高)が27分50秒の驚異の大会新記録で優勝した。

中学男子5^キで竹崎光希(新和中)が15分25秒で優勝、2位に地元甲佐中の稲葉智之が、15分32秒で入り地元選手賞を獲得。女子5^キは井沢良菜(有明高)が16分22秒で制した。

第30回記念大会(平成17年12月11日)から、10マイルの部において一般選手の部と外国人選手と日本人選手を含めた国際競技者の部に分けて開催した。

一般においては、三津谷祐(トヨタ自動車九州)が家谷和男(山陽特殊製鋼)との接戦を制して46分28秒で優勝し、新人賞も獲得。国際の部では、S・ワンジル(トヨタ自動車九州)が45分10秒の好タイムで優勝。敢闘賞は、6位に入った植木大道(トヨタ自動車九州)が獲得した。

高校10^キでは塚本祥也(熊本国府高)が30分24秒で優勝、2位に地元甲佐町出身の久佐賀悠(熊本工高)が30分27秒で入り地元競技者賞を獲得した。また中学男子5^キは

では和泉貴大(岡原中)が15分47秒で優勝、地元甲佐中の岡本峻悟が7位、本田平が11位と上位に入った。女子5^{キロ}は宗由香利(旭化成)が16分14秒で2回目の優勝を飾った。

第31回大会(平成18年12月10日)から、移転した甲佐町役場新庁舎(甲佐町豊内)前からのスタート、フィニッシュとなった。

10マイル一般の部は、30人近くの大集団で折り返しまで流れ、記録より勝負となった。ラスト3^{キロ}から目まぐるしくトップが入れ替わる展開で、1位から7位までの差が9秒以内に入るラスト勝負となり、岩井勇輝(旭化成)が47分09秒で接戦を制し、新人賞も獲得。2位には、同タイムで冢谷和男(山陽特殊製鋼)が入り、敢闘賞を獲得。国際競技者の部ではスズキのM・マサシが45分01秒、女子5^{キロ}で宗由香利(旭化成)が、16分14秒とともに3回目の優勝を飾った。

高校10^{キロ}は谷川智浩(熊本工高)が30分14秒で優勝。中学5^{キロ}の部では鳥居哲弥(北部中)が15分39秒で優勝、地元甲佐中の山下高志が、15分53秒で7位に入り地元競技者賞を獲得した。

第32回大会(平成19年12月9日)は、10マイル一般の部は、13位までが46分台という高速レースとなり、伊達秀晃(東海大)が46分28秒で、今井正人(トヨタ自動車九州)、前田和浩(九電工)や佐藤悠基(東海大)らを抑えて、日本人学生として初めて優勝し、新人賞も獲得。敢闘賞は、2位に入った野口憲司(四国電力)が獲得。

国際競技者の部ではJ・カリウキ(トヨタ紡織)が45分24秒で、第29回大会(高校10^{キロ}の部)以来の2回目の優勝を飾った。

高校10^{キロ}でD・カルクワ(鎮西高)が29分58秒の好タイムで、女子5^{キロ}では吉原由佳(環微研)が16分46秒で優勝。中学5^{キロ}の部では、岡本智隼(北部中)が15分48秒で優勝、地元甲佐中の栗田嶺(甲佐中)が、15分56秒で6位に入り地元競技者賞を獲得した。

第33回大会(平成20年12月7日)は、10マイル一般で10位までが46分台というハイペースの展開となり、保科光作(日清食品グループ)と座間紅柊(同)が10^{キロ}から抜け出し、保科が46分40秒で優勝、4秒差で2位に入った座間は、敢闘賞を獲得。3位に三津谷祐(トヨタ自動車九州)、4位に熊本県出身の豊後友章(旭化成)が入り、新人賞に輝いた。国際の部はG・ゲディオン(日清食品グループ)が45分15秒の好記録で優勝した。

高校10^{キロ}ではD・カルクワ(鎮西高)が29分16秒で2連覇を飾った。中学5^{キロ}では久保田和真(菊陽中)が15分38秒で優勝した。

また、女子5^{キロ}の部で上村亜紅(熊本中央高)が17分03秒で優勝、地元甲佐町出身

の岩井優紀(熊本中央高)が3位に入る健闘を見せ、地元競技者賞を獲得した。

第34回大会(平成21年12月6日)は、順天堂大学時代に箱根駅伝で「山の神」と呼ばれた今井正人(トヨタ自動車九州)が、出場3回目にして46分40秒の好タイムで初優勝。前半は佐藤悠基(日清食品グループ)が引っ張り、折り返し後に座間紅弥(日清食品グループ)が抜け出したが、残り2^{キロ}で今井、北村聡(日清食品グループ)につかまり、3人で終盤までもつれる展開となったが、ラストスパートで今井が北村に1秒差をつけて勝利した。

また、国際の部で、M・マサシ(スズキ)が44分52秒の好タイムで4度目の優勝。新人賞は、6位に入った堺晃一(富士通)、敢闘賞は8位の小野裕幸(日清食品グループ)が獲得した。

高校10^{キロ}の部でT・ワロル(鎮西高)が28分48秒の好タイムで優勝、鎮西高勢が3連覇した。女子5^{キロ}では前田彩里(熊本信愛高)が16分29秒で、中学男子5^{キロ}は大手敬史(あさぎり上中)が15分49秒で制した。

なお、地元競技者賞は1年生ながら16分47秒で14位に入った梅本祥太(甲佐中)が獲得した。

第35回記念大会(平成22年12月5日)一般競技者の部は今季急成長の渡邊竜二(トヨタ自動車九州)が前半から集団をリード、後半猛追してきた松藤大輔(カネボウ)を振り切り、初優勝を飾った。2位は松藤、3位に小西祐也(トヨタ自動車九州)が入った。

国際競技者の部はM・マサシ(スズキ浜松AC)が大会3度目の44分台(44分59秒)で走り2度目の2連覇を達成し、通算5度目の優勝を飾った。新人賞は小西、敢闘賞は松藤が獲得した。

高校10^{キロ}の部はT・ワロル(鎮西高)が28分27秒で2連覇。2～10位までを九州学院高勢が占めた。中学男子5^{キロ}は東遊馬(荒尾海陽中)が15分22秒で、女子5^{キロ}は右田愛(鹿児島・出水中央高)が17分13秒で制した。地元競技者賞は女子5^{キロ}の部で健闘した田上舞花(甲佐中2年)が獲得した。

第36回大会(平成23年12月4日)一般競技者の部は、2年前のベルリン世界選手権1万^{メートル}代表の岩井勇輝(旭化成)が、同時スタートとなった国際の部M・マサシ(スズキ浜松AC)を中盤から追走し、他の日本人選手を引き離し、2位の白石賢一(旭化成)に9秒差をつけ47分08秒で優勝。3位は松村康平(三菱重工長崎)が入った。今夏の韓国テグ世界選手権マラソン7位の堀端宏行(旭化成)は序盤先頭に立ったが中盤から伸びず19位に終わった。国際の部は、M・マサシが46分20秒で3連覇を達成した。

高校10^{キロ}の部は、全国高校駅伝に出場する九州学院高の主力が多数出場し、久保田和真(九州学院高3年)が29分35秒で優勝するなど8位以内に4人が入った。中

学男子5^{キロ}は洲崎遥平(本渡中)が15分47秒で優勝。地元甲佐中3年の梅本龍太が2位に入り地元競技者賞を獲得。また、女子5^{キロ}は鹿児島・出水中央高2年の右田愛が16分57秒で2連覇を飾った。

なお、新人賞は一般の部5位の荻野皓平(国学院大学)、敢闘賞は同2位の白石賢一が獲得した。

第37回大会(平成24年12月2日) 前年に続き国際の部は、一般の部と同時スタートとなった。レースは冷たい雨の中行われ、ペースは上がりず折返しを50名を超す大集団で通過。15^{キロ}手前で椎谷智広(トヨタ紡織)とエノック・オムワンバ(山梨学院大学)の一騎打ちとなり、ラストスパートで先行したE・オムワンバが46分25秒で国際の部を制し、僅かに届かなかったが椎谷が46分26秒で一般の部を制した。椎谷から5秒遅れの2位は今年度で廃部が決まっているエスビー食品の長谷川裕介、3位には松本稜(四国電力)が入り、新人賞も獲得した。敢闘賞は4位の小西祐也(トヨタ自動車九州)が受賞。

高校10^{キロ}の部は全国高校駅伝を控える九州学院高の内田翼(3年)が30分06秒で、中学男子5^{キロ}は上田結也(湯前中3年)が15分22秒で優勝。女子5^{キロ}は初出場の肥後銀行勢が1～3位を独占し、福田めぐみが16分54秒で制した。地元競技者賞には中学男子5^{キロ}の部で健闘した渡辺大智(甲佐中3年)が獲得した。

第38回大会(平成25年12月1日) 前年に続き国際の部は、一般の部と同時スタートとなった。序盤は20名を超す集団でレースは進み、折返し付近から押川裕貴(トヨタ自動車九州)が集団を引っ張る形となった。残り300mから押川と竹澤健介(北京五輪10000m、5000m 日本代表:住友電工)との一騎打ちとなり、ラストの直線で竹澤が先行し、胸の差で押川をかわし46分43秒で初優勝を飾り、併せて敢闘賞を獲得。3位には佐野広明(ホンダ)が入り新人賞を獲得した。国際の部はミカ・ジェル(トヨタ紡織)のみの出場で48分54秒だった。

高校10^{キロ}の部は福岡の強豪大牟田高校の堀龍彦(3年)、吉田亮壺(3年)が30分07秒の同タイムでワン・ツーフイニッシュを飾り、中学男子5^{キロ}は後半独走した西田壮志(坂本中3年)が15分23秒で優勝。女子5^{キロ}は地元肥後銀行勢との争いを高山琴海(シスメックス)が16分06秒で制した。今年度より地元競技者賞は2名となり、10マイル一般競技者の部の久佐賀悠(西鉄)、高校10^{キロ}の部の梅本龍太(熊本工業高2年)が受賞した。

第39回大会(平成26年12月7日) 10マイルの部(一般・国際の部同時スタート)は、序盤からカレミ・ズク(トヨタ自動車九州)がレースを引っ張り、折返し手前で集団から抜け

出し独走し、45 分 51 秒で国際の部を制した。一般の部は 10 名以上の集団の競り合いが最後まで続き、ラストの直線でスパート勝負に自信を持つ寺田夏生(JR東日本)が、前回大会優勝の竹澤健介(住友電工)ら強豪を退け 46 分 33 秒で初優勝、新人賞を獲得。2 位は小西祐也(トヨタ自動車九州)、3 位には梶原有高(プレス工業)が入り新人賞も獲得した。また、一般の部は 20 位までが 46 分台というレベルの高いレースであった。

高校10^{キロ}は、県外の強豪校佐賀:鳥栖工業、宮崎日大勢との接戦を、村上将真(開新高3年)が 30 分 17 秒で制し、開新高校初の本大会優勝者となった。中学男子5^{キロ}は、ラスト直線まで不知火中の田尻悠成(3 年)と奥村辰徳(2 年)の同僚対決となり、田尻が 15 分 40 秒で先着した。女子5^{キロ}は宮崎銀行、肥後銀行の実業団勢を押さえ 16 分 26 秒の同タイムながら一山麻緒(鹿児島:出水中央高2年)が優勝した。

地元競技者賞には、中学男子 11 位の戸高茉央亜(甲佐中3年)、高校男子 19 位の梅本龍太(熊本工業高3年)が、また中学女子の 1~3 位に贈られる女子敢闘賞を地元甲佐中の飯田怜(3 年)が受賞した。

第40回大会(平成27年11月29日) 10マイルの部(一般・国際の部同時スタート)は、スタート直後からカレミ・ズク(トヨタ自動車九州)が引っ張り、4^{キロ}すぎに抜け出すとそのまま加速し、本大会の歴代4位となる、45 分 19 秒で 2 連覇を達成した。一般の部は、社会人 2 年目の茂木圭次郎と村山謙太(ともに旭化成)がレース終盤まで並走し、ラストの直線手前で茂木が村山を振り切り 46 分 8 秒で初優勝した。タイム差なしの 2 位に入った村山が新人賞を獲得。3 位から 6 位まではトヨタ自動車九州の選手が入った。

高校 10^{キロ}は、佐賀の強豪・鳥栖工業の宗直輝(3 年)が 30 分 15 秒で優勝し、4 位まで鳥栖工業の選手が占める結果となった。中学男子 5^{キロ}は昨年 2 位だった奥村辰徳(不知火中3年)が 15 分 42 秒で優勝した。女子 5^{キロ}は大谷美優、箱山侑香(ワコール)の同僚対決を制した大谷が 16 分 15 秒で優勝。5 位に入った池田絵里香(肥後銀行)が敢闘賞に選ばれた。

地元競技者賞は、中学男子 12 位の岡崎亮(甲佐中3年)、高校男子 18 位の渡辺大智(国府高校3年)が受賞した。

第41回大会(平成28年11月27日)10マイルの部(一般・国際の部同時スタート)は、箱根駅伝で活躍した元祖「山の神」と称された今井正人(トヨタ自動車九州)、柏原竜二(富士通)、神野大地(コニカミノルタ)の3名がエントリーし、ロードレース初の揃い踏み、スタート前から異常な盛り上がりを見せていた。レースは、カレミ・ズク(トヨタ自動車九州)、エドワード・ワウエル(NTN)、神野大地が引っ張る展開。残り 5^{キロ}で抜け出した K・ズクが 46 分 19 秒で優勝し、国際の部 3 連覇を果たした。一般の部は、青山学院大学時代

に「山の神」と称された神野大地が粘りの走りを見せ、2位に入った元祖「山の神」今井正人に8秒の差をつけて優勝し、新人賞も獲得した。敢闘賞は7位に入った塩尻和也(順天堂大学)が受賞。

高校10^{キロ}は、西田壮志(九州学院高3年)が従来の日本人最高記録を1秒更新する29分34秒で優勝し、敢闘賞を獲得。中学男子5^{キロ}は、東原愛斗(宇土鶴城中3年)が15分55秒で優勝した。女子5^{キロ}は、池田絵理香(肥後銀行)が16分25秒で制し、3秒差の2位には同じく肥後銀行の高卒ルーキー福田妃加里が入った。

地元競技者賞は、高崎蓮斗(甲佐中3年)と上田真路(熊本工業高3年)が受賞した。

第42回大会(平成29年12月3日)10マイルの部(一般・国際の部同時スタート)は、外国人選手を中心にハイペースでレースが進んだ。ラスト3^{キロ}で設楽悠太(Honda)がペースアップし集団が絞られる。そのまま抜け出した設楽が日本歴代4位となる、45分58秒で優勝し敢闘賞を獲得した。また、新人賞は3位に入った大六野秀畝(旭化成)が受賞。国際競技の部は、カレミ・ズク(トヨタ自動車九州)が4連覇を達成し、本大会の連覇記録を塗り替えた。

高校10^{キロ}は、井川龍人(九州学院高2年)が29分45秒で制し、敢闘賞を獲得。中学男子5^{キロ}は、10月に行われたジュニアオリンピックの3000mで3位に入った鶴川正也(託麻中3年)が15分21秒で優勝した。女子5^{キロ}は、昨年2位の福田妃加里(肥後銀行)が16分31秒で制した。

地元競技者賞は、早崎泰晟(熊本工業高2年)と岡崎亮(開新高校2年)が受賞した。
※設楽悠太(Honda)は、本大会の2ヶ月後の東京マラソンで2時間6分11秒の日本最高記録を樹立した

第43回大会(平成30年12月2日)10マイルの部(一般・国際の部同時スタート)は、序盤大集団でレースが進み、次第に集団が絞られて縦長になる展開。ラストはジョン・ムリツ(トヨタ自動車九州)が振り切り45分56秒で国際の部初優勝を飾った。2秒差の2位にサイラス・キンゴリ(SGHグループ)が入った。一般の部は、ラストまでJ・ムリツ、S・キンゴリと競り合った藤本拓(トヨタ自動車)が日本歴代4位となる45分57秒で制した。2位には学生最高記録となる46分6秒で塩尻和也(順天堂大学)が入った。敢闘賞は4位の谷川智浩(コニカミノルタ)、新人賞は5位の大塚祥平(九電工)が獲得した。

高校10^{キロ}は、福岡の東海大福岡高校のキムンゲ・サイモン(3年)が29分19秒の好タイムで優勝。3位に入った鶴川正也(九州学院高1年)が敢闘賞を獲得した。中学男子5^{キロ}は岩下翔哉(一の宮中3年)が15分58秒で優勝。女子5^{キロ}は、1位～3位まで肥後銀行勢が独占し、池田絵理香が16分36秒で優勝。1秒差の2位に坂本えり、3秒差の3位に高野鈴菜が入った。

地元競技者賞は、稲葉伯(甲佐中 1 年)と岡崎亮(開新高校 3 年)が受賞した。

第 44 回大会(令和元年 12 月 1 日)10 マイルの部(一般・国際の部同時スタート)は、外国人選手を中心にハイペースでレースが進んだ。国際の部は 10 マイル初挑戦のアブラハム・キャプシスキプヤティチ(旭化成)が 45 分 33 秒で初優勝を飾った。一般の部は国際の部に居並ぶ高速ランナーの外国勢に日本勢ただ一人食い下がった市田宏(旭化成)が 46 分 02 秒で優勝した。敢闘賞は 5 位の小野知大(旭化成)、新人賞は藤木宏太(國學院大學)が獲得した。

高校 10 ^{キロ}は、湯浅仁(宮崎日大高)が 29 分 39 秒で優勝。6 位に入った内田征治(開新高)が敢闘賞を獲得した。

中学男子 5 ^{キロ}は松下優人(菊池南中)が 16 分 01 秒で優勝。女子 5 ^{キロ}は肥後銀行の境田真夕が 16 分 11 秒で優勝、1 秒差の 2 位に高野鈴菜が 16 分 12 秒とワンツーフイニッシュし、3 位に大同美空(岩谷産業)が 16 分 18 秒で入賞した。

地元競技者賞は、稲葉拍(甲佐中)、大隅遥音(甲佐中)が受賞した。

第 45 回大会(令和 2 年 12 月 6 日) 中止。

新型コロナウイルス感染症の全国的な流行により、感染症の感染防止対策を講じた準備・運営管理や、規模縮小しての運営を検討したが、安全な運営や選手・スタッフ・観客等関係者の安全確保が困難であると判断したため、大会が中止となった。

第 46 回大会(令和 3 年 12 月 5 日) 中止。

新型コロナウイルス感染症の全国的な流行により、中止は2年連続。感染症の感染防止対策を講じた準備・運営管理や、規模縮小しての運営を検討したが、安全な運営や選手・スタッフ・観客等関係者の安全確保が困難であると判断したため、大会が中止となった。

第 47 回大会(令和 4 年 12 月 4 日)

10 マイルの部(一般・国際の部同時スタート)は、ベナード・コエチ(九電工)を中心にハイペースでレースが進んだ。国際の部は 4 km過ぎから独走態勢を築いたベナード・コエチ(九電工)が 44 分 04 秒の世界最高タイムで優勝した。一般の部は、外国勢に積極的に挑んだ難波天(トーエネック)が、日本人大会記録で優勝。敢闘賞は 2 位の西研人(大阪ガス)、新人賞は大学生で 8 位に入賞した中西大翔(國學院大學)が獲得した。

高校 10 kmの部は、マイナ・ダンカン(専大玉名高)が 29 分 20 秒の好タイムで優勝。日本人トップは、日本人大会記録となる 29 分 25 秒のタイムで 2 位に入った永本脩(九州学院高)だった。

中学男子 5 kmの部は、尾形瑛基(人吉第一中)が優勝。

女子 5 kmの部は、田中希実(豊田自動織機)が、折り返し後スピードアップし、大会記録の 15 分 53 秒で優勝。2 位に入った酒井美玖(肥後銀行)が敢闘賞獲得した。

地元競技者賞は、薮田舷希(甲佐中)、後藤悠月(甲佐中)が受賞した。

第 48 回大会(令和 5 年 12 月 3 日)

10 マイルの部(一般・国際の部同時スタート)は、レース序盤はスローペースな展開となり、大集団でレースが進む。折り返し後集団がばらけ始め、10 km手前で優勝争いは、カマウ・パトリック(上武大学)とクレオフアス・カンディエ(三菱重工)の 2 人に絞られる。6 km 以上にも及ぶ 2 人の並走の末、ラスト勝負を制したカマウ・パトリック(上武大学)が 45 分 46 秒で優勝。1 秒差で惜しくも敗れたクレオフアス・カンディエ(三菱重工)が 2 位に入った。日本人トップ争いは、10 km手前から 4 人の争いに。ラスト 2 km付近から浅井皓貴(順天堂大学)と古賀淳紫(安川電機)のデットヒートに。ラストの直線にまでもつれた争いを制した浅井皓貴(順天堂大学)が日本人トップで敢闘賞を獲得。2 位には 3 秒差で古賀淳紫(安川電機)、3 位に入った牧瀬圭斗(トヨタ自動車九州)が新人賞を獲得した。

高校 10 kmの部は、増永一心(開新高校)が 30 分 08 秒で優勝。

中学男子 5 kmの部は、藤井雄大(宮崎県・住吉中)が 15 分 26 秒で優勝。

女子 5 kmの部は、南雲栞理が 16 分 24 秒で優勝し、敢闘賞を獲得。

地元競技者賞は、中学男子 5 kmの部で、8 位入賞まで 2 秒差で 9 位だった坂下湧信(甲佐中)と 15 位の薮田舷希(甲佐中)が受賞した。

第 49 回大会(令和 6 年 12 月 1 日)

今大会から、WA(ワールドアスレティックス)の公認を取得し、WRk(ワールドランキングコンペティション)の対象レースとなった。

10 マイルの部(一般・国際の部同時スタート)は、前回大会同様スローな展開となり、序盤は大集団でレースが進む。6.5 kmの給水のポイントでアントニー・マイナ(トヨタ自動車九州)が前へ出て、縦長の展開に。徐々に集団は絞られ、12 km過ぎには外国勢 3 人の争いに。ラスト勝負までもつれ、スパートで振り切ったアントニー・マイナ(トヨタ自動車九州)が 46 分 7 秒で優勝。アントニー・マイナの弟であり、熊本の専大玉名高校出身のダンカン・マイナ(専修大学)が 1 秒差の 2 位に入った。日本人トップ争いもラストまでもつれ、大学 1 年生の玉目陸(順天堂大学)が 46 分 21 秒で優勝し、新人賞を獲得。5 位に入った足羽純実(Honda)が敢闘賞を獲得した。

今大会から新設された 10 km一般の部は、イエゴン・ヴィンセント(Honda)が優勝。日本人トップは、7 位に入った森風也(Honda)だった。

高校 10 kmの部は、久保茉潤(大牟田高校)が 29 分 58 秒で優勝。熊本勢トップは、4 位に入った園木縁(熊本工業高校)だった。

中学男子 5 kmの部は、野中大雅(明星中)が 15 分 28 秒で優勝。地元甲佐中の後藤

悠月が 5 位入賞し、地元競技者賞を受賞した。

女子 5 km の部は、世界記録更新を狙うゲティッチアグネス(キヤノン)が序盤から飛び出す展開に。世界記録の更新はならなかったものの、14 分 48 秒とこれまでの大会記録を 1 分以上更新する好タイムで優勝。2 位に入った田中希実(NewBalance)は 15 分 25 秒の日本記録を樹立。3 位に入った渡邊菜々美(パナソニック)も従来の日本記録まであと 1 秒に迫る 15 分 35 秒の好タイムであった。4 位のチェロティッチ・ダイアナ(肥後銀行)が敢闘賞を獲得した。

地元競技者賞は、中学 5 km の部 5 位の後藤悠月(甲佐中)、大塚晃生(甲佐中)が受賞した。

※本大会の記録

・10マイル(国際競技者)	B・コエチ	(九電工)	44 分 04 秒(第 47 回大会)
・10マイル(一般競技者)	難波 天	(トーエネック)	45 分 50 秒(第 47 回大会)
・10キロ(一般の部)	Y・ヴィンセント	(Honda)	28 分 05 秒(第 49 回大会)
・10キロ(高校男子)	J・カリウキ	(滋賀学園高)	27 分 50 秒(第 29 回大会)
・5キロ(中学男子)	吉野 将悟	(菊陽中)	15 分 10 秒(第 26 回大会)
・5キロ(女 子)	G・アグネス	(キヤノン)	14 分 48 秒(第 49 回大会)